

茨幕高生 被災地の今 学ぼう

渋谷教育学園幕張高校(千葉市美浜区)の生徒が、2011年3月の東日本大震災と東京電力福島第一原発事故で大きな被害を受けた福島県双葉町を訪れ、震災復興学習に取り組んだ。福島県と包括連携協定を結び、定期的に現地へ学生が赴いている神田外語大(同)の協力を得て実現した。茨幕生らは、住民の帰還が始まってわずか1年あまりのまちを歩き、復興の現状と未来に向けた課題解決を高校生の視点で探った。(中谷秀樹)

神田外大と連携

参加したのは1年生8人で、11月中旬に2泊3日で被災地を訪れた。学習拠点として、神田外大の学生が震災復興学習の際に利用する大学所有の研修施設「プリティッシュユヒルズ」(福島県天栄村)を活用。双葉町内の「東日本大震災・原子力災害伝承館」や、浅野燃糸(岐阜県安八町)が今年3月に町内で稼働させた新工場「フタバスーパーゼロミル」、被災して福島県初の震災遺構となった浪江町立浪江小学校などを見学しながら、地域を歩いた。

浅野燃糸では燃糸機20台が並ぶ工場内に入り、同社の浅野雅己社長から復興を後押しするために福島進出を決めた思いなどを聞いた。

今回の学習は「自ら考え、思いやる心」がテーマ。英語教育に力を入れる高校として、生徒がフィールドワークの感想を英語でスピーチしたほか、宿泊研修後には神田外大で全4回の探究講座に臨んだ。被災地の見聞を通じて地域課題を探し、住民の豊かな暮らしにつながる解決法を12月2日の最終回で研究発表し

福島・双葉町 帰還住民の絆の強さなど実感



た。参加した高橋晴菜さん(16)は「子どものころからまちづくりに興味があり、知識やヒントを得られればと思い参加した」といい、地域活性化の観点から「浅野燃糸の経験を、これから双葉町に進出しよ」と考える他の企業にどう生かせるのか自分なりに考えた。

住民の帰還が始まって1年あまりの被災地を歩く渋谷幕張高の生徒ら(左)＝福島県双葉町で(神田外大提供)

双葉町での見聞を研究発表するため、神田外大の石井教授(手前右)とミーティングする渋谷幕張高の生徒ら＝千葉市美浜区の同大で



てみた」と語った。青木仁胡さん(16)は「双葉町に戻って暮らす人たちの地域コミュニティの強さを実感した」と振り返り、これにちなんだ研究に励んだ。

一連の学習をサポートした、神田外大グローバル・リベラルアーツ学部の石井雅章教授(社会学)は「高校生として被災地を見て、問題意識を持ち、もやもやしたと思う。自分の感情に訴えたものが何なのか、短い時間で言葉にまとめて発表することは他の学習や研究にもつながる経験になる」と評した。